

令和5年度全国学力・学習状況調査 結果概要

女川町立女川中学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

- 2 調査実施月日
- | | |
|---------------|--------------|
| ①国語、数学、英語、質問紙 | 令和5年4月18日(火) |
| ②英語(話すこと) | 令和5年5月18日(木) |

- 3 対象学年
- 女川中学校第3学年 生徒31名
- 当日実施生徒 ①29名 ②24名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語、数学、英語
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	国語	数学	英語	英語(話すこと)
宮城県	大きく下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)	かなり下回っている(▼)	—
全国	大きく下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)	かなり下回っている(▼)	かなり下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・選択問題に関しては無解答率が低く、解答しようという意欲は見られた。

(課題)

- ・学習指導要領の内容全てにおいて全国平均を大きく下回った。
- ・全国の平均正答率が8割を超えている問題でも、多いところで5割弱の生徒が誤答しており、基礎が身に付いていないことが分かる。
- ・〔思考力・判断力・表現力〕における「読むこと」(問題番号4三)では、無解答率が3割を超えており、自分の考えを論理的にまとめて書くことに苦手意識を持っている生徒が多いことが分かる。

②指導改善のポイント

- ・国語への興味関心を高める工夫を継続し、導入で動画やパワーポイント等の視覚的教材

を活用して、イメージを持たせてから教材に臨ませる。

- ・新出漢字については、書き方と読み方、意味や用法を確認する時間を十分に確保し、毎授業で漢字テストを行うことを継続して定着を図る。
- ・教材や発問に対して自分の考えを持ったり書いたりすることが苦手な生徒に対し、付箋を用いて単語だけでも書くように促したり、ペアやグループ、集団において友だちの意見に触れる機会を多く保証したりするなど、段階を踏んで、書くことに対する抵抗感を取り除いていく。

③質問紙から

○国語への興味・関心

国語の授業に対して「大切だ」と思っている生徒が8割以上いた。また、国語の学習が社会に出た時に役立つと思っていると回答した生徒も9割を超えている。いずれも、宮城県や全国の平均を上回っており、国語の授業に対して肯定的な生徒が多いことがうかがえる。生徒の国語への必要感をより向上させるために、学習活動では実生活に即した場面を設定し、目的意識を持たせた授業を行っていく。

○ICTの効果的な活用について

本校ではICTの環境が整備されているので、国語のみならず他の教科でも積極的に活用している。そのため、タブレット等の機器の扱いには慣れており、比較的苦手意識も低いと言える。その特性を生かし、情報を収集して整理した内容を分かりやすく相手に表現する場面や、考えたことを互いに共有し、個人の考えや学級全体の考えを深める場面などを取り入れた授業を展開していく。

○読書について

およそ7割の生徒が、「読書を全くしない」「10分より少ない」と解答した。10分と解答した生徒も、朝読書の時間（およそ10分間）を指していると思われ、自発的に読書に勤しむ生徒はかなり少ないと言える。授業では、図書室を活用し、本の分類や配置について説明したり、気になる本を手にとらせたりと、本に触れ合う機会を持つようにした。今後、委員会などを活用し、図書室の利用の活性化や家庭での読書の推奨に取り組んでいく。

(2) 数学の成果と課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・具体的に数値が示された上で、問題場面における考察の対象を的確に捉えたり、自然数や四分位範囲の意味を答えたりするなど、各領域における学習の基盤を問う問題の正答率は4割を超えた。
- ・「選択式」問題（全4題）において、無回答がなかったことから、事前学習などを経て、全生徒が「解答しよう」とする意識を持てたことが分かった。また、「短答式」問題（全6題）において、その内の4題で正答した生徒の割合が3割を超えており、基礎的・基本的な計算力や知識をある程度身に付けている生徒が全体の3割程度いることが明らか

になった。

(課題)

- ・本調査における数学の学力は低い。
- ・数学的な思考力、表現力、読解力が劣っている。
- ・文章量、情報量が多い問題に対する誤答率や無回答率が高い。
- ・知識や技能の定着が不十分である。

②指導改善のポイント

- ・知識や技能の定着を図るため、ドリルや計算問題に取り組みさせる。その際、問題は数パターンを準備し、これに何度も繰り返し取り組みさせる。
- ・数学における「説明する力」と「文章力」を伸ばす指導を継続させ、力の定着を図る。そのために、「(理由・根拠)なので(考え・性質)である。」といった簡易な記述から始め、学習内容に応じて適宜文章で説明する時間を授業内に設定し、実践する。
- ・文章が長かったり、情報量が多かったりする問題を意図的に提示し、問題解決に向けて必要な資料や情報を読み取る力を伸ばす指導を行う。
- ・習熟度別学習をこれからも実施し、学習内容の理解に努力を要する生徒への指導を継続していく。

③質問紙から

- ・「数学の勉強が好き」という質問事項に対して、肯定的な回答を選んだ生徒の割合は半数に満たなかった。しかし、「数学の授業はよく分かる」という質問事項に対して肯定的な回答を選んだ生徒の割合は全体の7割を超え、全国のそれにはわずかに及ばなかったが、宮城県を上回った。
- ・「数学の勉強は大切だと思うか」という質問事項に対して肯定的な回答を選んだ生徒の割合は8割を超えた。また「数学で学習した事項は、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」という質問事項に対しては、肯定的な回答を選んだ生徒の割合がほぼ8割であった。これらの結果から、生徒は数学の学習の重要性等を十分に認識していることがうかがえた。
- ・数学に対して肯定的な回答を選択している生徒が多かったことから、以下の指導を改善しながら行っていく。

○「基礎・基本的な知識・技能」

- ・授業の導入時においては、前時までの学習内容を振り返らせるテストを行う。また、展開の終末時においては確認問題に取り組みさせる。
- ・授業の終結時には「授業の振り返り」を行い、何が「分かった」「できた」、また「分からないこと。できなかったこと」を記述させ、「生徒の学習」と「授業」のPDCAサイクルを確立する。
- ・教師が小学校学習指導要領を踏まえ、生徒には既習事項の復習や関連付けを行い、学び直しを推進する。
- ・ワークやA I型学習教材(キュービナ)等を用いて問題を多くこなしたり、定期考査や小テストにおいては生徒の解答を細かく採点して自信を付けさせたりするなどの取組を継続

する。

○「活用する力」

- ・ 計算方法、図形等の性質、公式や定理を確認する際、その根拠や関連事項についても確認する。生徒が、計算方法等を理解して覚えた後に、問題演習時間を多く設定したり、応用問題を与えたりする。
- ・ 学び合いの時間を設定し、自分の考えを伝えたり、友人の考えを取り入れたりさせる。

○学習に対する興味・関心等について

- ・ ICTを活用し、問題の解釈を促すとともに、理解の深化を図る。
- ・ 数学で学んだ内容が生活で顕著に生かされている教材を授業に取り入れる。

(3) 英語の成果と課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・ 図書館やメールに関する問いに関しては、宮城県平均と同等かかなり上回る正答率であり、生徒たちの身近な内容については理解したり、表現したりすることができる生徒が多い。
- ・ 選択問題については、無回答者はほぼいない。

(課題)

- ・ 学習指導要領の領域別正答率において、4領域全てが宮城県、全国平均を下回っている。
- ・ 特に「聞くこと」については、宮城県、全国平均を大きく下回っている。
- ・ 観点別正答率において、知識・技能が宮城県平均よりも大きく下回っており、本校の大きな課題であることが分かる。
- ・ 「書くこと」における記述式問題では5割程度の無回答者が見られた。短答式問題でも、2割から5割程度の無回答率となっており、「書くこと」に対する意欲が低い。
- ・ 「話すこと」について、各問題で無回答の生徒が3割程度おり、英語を話すことに対する恥ずかしさや苦手意識が強くあることが分かった。

②指導改善のポイント

- ・ 普段の授業から、4領域をバランスよく指導できるよう計画を再考する。
- ・ 授業の中に言語活動の時間を多く取り入れ、英語を話したり聞いたりすることに習慣的に取り組むことで、苦手意識を取り除く。
- ・ 基本的な知識や技能の習得に向けて、授業内で既習事項を繰り返し指導していくことによって、単語や語彙の定着を図る。また、予習や家庭学習の内容を一人一人チェックし、助言することで基本的な知識・技能を身に付けさせる。
- ・ 「書くこと」に対する意欲を高めるため、短い英作文を2時間に1回程度実施し、英語で身の回りのこと（自分に関する英文）について書くことに慣れさせる。
- ・ 英語を「話すこと」に対する抵抗をなくすため、授業の中に「パフォーマンステスト」を取り入れることで、必然的に英語を話す機会を作り出し、英語を話すことに対する恥ずかしさや苦手意識を取り除く。特に英語が苦手な生徒については、取り組みやすくすることに加え、何度も繰り返して取り組むことができるように、ICT機器を活用させ、

繰り返し模範音声を聞いて模倣させる。

③質問紙から

- ・解答時間についての質問に、約6割の生徒が「時間が余った」「ちょうどよかった」と回答しているにも関わらず、無回答率が高くなっている。このことから、解答時間があるにも関わらず、回答をあきらめている生徒が多いことが分かった。最後まであきらめずに取り組む姿勢を身に付けさせていくことが今後の課題である。
- ・「書くこと」「話すこと」についての調査では、問題の内容は理解できているが、表現することができなかつたと回答した生徒が多かった。このことから、英語を用いて表現すること（アウトプット）に積極的に取り組ませていく必要がある。

7 生徒質問紙調査結果から（○成果 ▲課題）

（1）生活習慣・学習習慣について

- ほとんどの生徒が、朝食を毎日食べて登校している。
- 毎日同じくらいの時刻に起きている生徒が9割近くいる。

（2）規範意識・自己有用感について

- 将来の夢や目標を約8割の生徒が持っており、宮城県、全国平均を大きく上回っている。
- 自分と違う意見について考えることを楽しいと感じている生徒が8割を超え、宮城県、全国平均を上回っている。
- 9割の生徒が部活動に参加し、4日以上活動している生徒が8割近くいる。
- ▲普段の生活の中で、幸せな気持ちになることが「よくある」生徒は全体の4分の1程度で、「ときどきある」生徒は半分以上いる。

（3）学習に対する興味・関心等について

- 7割以上の生徒が週3回以上、学習の中でICT機器を活用していると回答し、学習の中でPC・タブレットなどICT機器を使うのは「勉強の役に立つと思っている」と回答した生徒が8割近くおり、宮城県、全国平均を大きく上回っている。
- ▲平日に家庭で2時間以上学習している生徒は2割程度で、まったく学習していない生徒も2割程度であった。休日の学習時間においては、平日よりも長い時間学習している生徒がいるものの、まったく学習していない生徒が4割程度見られたことは、大きな課題である。
- ▲課題解決に向けて、自分で考え取り組んだ生徒は2割に満たない状況にあり、宮城県、全国平均よりも大きく下回っている。
- ▲学習したことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていない生徒が4割以上おり、宮城県平均を大きく下回っている。
- ▲計画的な学習の取組について、「よくしている」もしくは「ときどきしている」生徒は4割程度で、宮城県、全国平均を大きく下回っている。
- ▲読書が好きと回答している生徒が4割以上いるが、宮城県、全国平均に比べると大きく下回っている。自宅にある本の数もあまり多くない傾向にある。

8 今後の取組

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

- ①生徒が「何が分かったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の充実
 - ・宮城県教育委員会の示す「学力向上に向けた5つの提言」から1時間の授業における「ねらい」の明確に示す場面を設定し、学習の見通しを持たせ、学習意欲の定着を図る。
 - ・校内研究により、生徒の苦手を取り除く手立てを講じ、教師が互いの取組を共有し合ったり、授業を見合ったりするなど指導力向上を目指す。
- ②個に応じた学習支援の充実
 - ・各教科で取り組んでいる小テストや単元の振り返り、A I型学習教材（キュビナ）などを活用し、生徒個々の習熟度や苦手を把握して学習課題の設定や授業展開の工夫に生かす。
 - ・教科の特性により、習熟度に応じた少人数学習やティームティーチングにより、学習支援を継続していく。
 - ・A I型学習教材（キュビナ）を活用し、過去の学習内容を確認したり、個に応じた振り返りや復習を行ったりする。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

- ①基本的な生活習慣の確立
 - ・生徒会を中心に進めている「スーパーうみねこルール」への取組を通して、生活リズムを整え、健康的な生活を送ることへの意識を高めさせる。
 - ・生徒会の保健・安全委員会で実施している「スマイルタイム」において、自分の生活を振り返りながら必要に応じた生活改善を意識させ、生活習慣の確立を図る。
- ②自己有用感の構築
 - ・学級活動や学校行事において、生徒の活躍の場を意図的に設け、取組を通して、生徒の個性を認めたり、得意なことを生かしたりすることで、「自分にもできる」と実感できるようにする。
 - ・職場体験を通し、地域の中で勤労観や社会性を養う活動を行う。
- ③家庭学習の定着
 - ・学習を苦手とする生徒に対し、無理なく取り組める学習の方法を提示し、学習習慣の構築・定着を図る。
 - ・A I型学習教材（キュビナ）を活用し、学習内容を確認したり、苦手部分の復習を行ったり、個に応じた繰り返しの学習を進める。

(3) 女川小学校、女川向学館、地域との連携強化

- ①小学校との連携
 - ・校内研究の主題を共通のものにすることで、9年間を見通した指導を行う。
 - ・小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うことで各教科の指導においての9年間のシラバスを活用し、系統立てて指導する。
 - ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行う。

②女川向学館との連携

- ・放課後学習会や授業において、女川向学館の職員とともに学習支援の充実を図る。
- ・各種検定において、女川向学館の実施協力を得て、認定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③地域人材の活用

- ・総合的な学習の時間に取り組んでいる「潮活動」では、地域の人々を中心に講師として招いたり、地域の特性をうかがって講座に組み入れたりしながら各講座の学習を進める。
- ・女川町教育委員会と連携し、各学年の実態に応じた教育講座を設定したり、個別の学習支援を必要とする生徒に対して、個別支援の機会を設けたりしている。